

かささぎ通信 第148号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2025年 6月 13日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2025年5月の「森三郎の作品を読む会」では、
「洋服屋のお松さん」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943年12月)「鈴」(『赤い鳥』1933年12月号)を読みました。

「洋服屋のお松さん」(『雪こんこんお寺の柿の木』全二十作の内、第十九番目の作品)は、「日雇(ひよう)とり」という日雇いの労働者の女性の姿を少年の目を通して描いた作品です。和雄の家ではお母さんは店の仕事に忙しく、時々人を雇って家事の一部を任せています。洗濯物が多い時に雇われたのが「洋服屋のお松さん」です。お松さんは洋服屋の娘として生まれましたが、ご亭主が服役中なので一人で日雇いの仕事をしているのです。お松さんは逆境にもめげず明るく生きています。仕事は早いけれど粗雑なので雇い主のお母さんとしてはハラハラしますが、あまり細かいことも言えません。よその家にも働きに行く人なので、食事などの待遇にも気を使っていることがうかがえます。陽気にならば歌を歌いながら仕事をするお松さんを見て、和雄は世間の他の人の暮らしぶりを知っていきます。しかしその捉え方は、問題を抱える社会の断面を鋭く切り取るというよりむしろ、全体を童話としてまとめた森三郎らしい作品でした。

『赤い鳥』昭和8年12月号の「鈴」は、四歳の良一が虫歯の治療に歯医者へ通う際のエピソードです。なかなか歯医者に行きたがらない良一を、ご褒美に汽車を買ってあげる約束をして説得し、歯医者に通わせます。初めの日には爺やが連れて行ってくれました。帰り道、爺やは小川の岸に咲く猫柳の一枝を折って、「猫だ、猫だ」と良一に渡します。それを猫の卵と思い込んだ良一は、爺やの言う通りに、庭の土に植えます。穴を掘った時にミミズが出てきたので、良一はおもちゃのシャベルでミミズを半分に切ってしまう。女中のお春に「今夜、ミミズが化けて来ますよ」と言われ、良一はミミズのお墓を作ってやりました。その後お春に連れられて歯医者に通い、いよいよ治療が終わると約束通りおもちゃの汽車を買って貰うことになりました。良一

は店先の箱の中に赤い紐の付いた小さな金色の鈴がいっぱいある事に気付くと、汽車の代わりに鈴を二十個も買って貰いました。猫たちの首につるしてやろうと考えたのです。でも家に帰っても猫の卵の木から猫は生まれていませんでした。爺やに話すと、良一がこの間ミミズを殺したから、猫が怒ったのだろうと言います。良一は自分がとても悪いことをしたと思い、ミミズのお墓に鈴を一つ埋めてやりました。

読み終わって、爺やが語る猫柳の話はその場しのぎに子どもをだましているようで、心地よくないという感想がありました。逆に、聞き分けの良くない幼子を説得する時に、一緒に話を作っていくことは子育ての段階でよくあったと、懐かしそうに思いました。初めからだまそうとしてだましているわけではないという声もありました。実際爺やは「猫だ、猫だ」と歌った時、元はと言えば「猫じゃ猫じゃとおしゃやますが」と俗謡「オッチョコチョイ節」を歌っていたのです。良一に聞かれるままにそこから猫の卵のお話に発展してしまいました。ミミズが化けて来ないかと良一が心配している時、爺やは「そのミミズも、坊ちゃんに殺される約束で生まれてきたのでござんしよ」と言って、お念仏を唱え、良一を安心させてくれたのです。歯医者さんのキーンという機会音の思い出、ミミズをいじめると罰が当たるといふ俗信を聞かされた思い出なども出て来て、会は盛り上がりました。実は三郎さんは後年、赤い鳥社の庭先に出るガマを箒でめった打ちにして殺してしまったことを述懐しています(『鈴木三重吉研究』六『新文明』1959/3)。上京し一緒に住んでいたお母さんが「そのガマも前に殺される約束で生まれてきたのだらうね」と言って、ガマの冥福のために念仏を唱えてくれたそうです。母のこの言葉は「鈴」の中の爺やの言葉に置き換わったのです。三郎さんが実体験を童話の世界に広げる方法を見ることができました。

〈次回予定〉2025年7月11日(金)午後一時半~三時半

『赤い鳥』1934年2月、3月の3作品を読む

「風船虫」(2月)、「秋蟬」(2月)、「ピアノ」(3月)